http://www.chunichi.co.jp/earthquake/　毎月1日は東海地震特集

備える

その86「体験の継承」

怖さを実感、後世に

六千人以上が亡くなった阪神大震災から十五年が過ぎた。神戸市中央区にある「人と防災未来センター」は、大震災を教訓として後世に伝える施設だ。東海地震を控えて防災意識の向上が叫ばれるが、この地方にはこの手の施設は意外に少ない。大震災を追体験できる同センターで、防災、減災とは何かを考えた。

（石屋法道）

神戸・人と防災未来センター

来訪過半数が小中高生

耳をつんざく音、降り注ぐガラス片、向かってくるコンクリートの塊―。直前まで無邪気にはしゃいでいた社会見学の小学生たちが黙り込んだ。中には耳をふさいだり、うずくまる子もいる。

一九九五年一月十七日午前五時四十六分。来場者が最初に見る西館四階の「1・17シアター」は特撮技術を駆使し、大震災発生の瞬間を映像と光と音で再現した。唐突な恐怖。本当に揺れるわけではないが、大音響が肌を打ち、七分間、手すりを握る手に力が入った。

次に現れるのは震災直後の実物大のジオラマ模型。一階がつぶれ傾いたビルが頭上に迫る。脇には完全にひしゃげた木造家屋も。薄暗く、被災直後のような緊張感が漂う。さらに姉を亡くした少女の目を通した十五分のドラマは、実際の映像が織り交ぜられ、悲しみを乗り越えて進む被災者らの苦難が胸を突いた。

震災のすさまじさを痛感し、三階へ。センターが保管する約十七万点の震災資料のうち、約八百四十点の実物が時系列に並ぶ。止まった時計、溶けたアーケード、伝言メモ…。トイレの不足やプライバシーがないなど避難生活の実情も分かる。じっくり見ると一日では足りないぐらいだ。

二階には地震のメカニズムを実験できるブースや防災グッズの展示がある。震災の恐ろしさや復興の厳しさを疑似体験した後だけに、見入ってしまう。水と砂を入れたバケツを揺らす液状化現象の実験や、家具倒壊が見て分かるミニチュアなどが分かりやすい。

人のきずな重要

「語り部」をはじめ、来場者に応対するボランティアスタッフの多くは被災者。約百五十人が登録する。神戸市灘区で三時間埋もれていた津久井幸子さん（八〇）は「助かった命を役立てるのは当然」との思いで開館時から参加。「私は布団があって助かった。被災者でも一人一人体験は違う。伝えることが減災につながる」と話す。

やはり被災者の同市東灘区の小倉侃（つよし）さん（七一）は「肝心なのは人のきずな。コミュニティーがなければ防災はできない。建物ばかり無理をして街をつくっても駄目だ」と訴える。

センター西館は二〇〇二年四月、兵庫県と国が三十億円ずつ拠出して設立した。山本健一副センター長は「復興も後半に入り、教訓を地域に残そうという機運になった。それも単なる博物館ではなく、展示と研究を両輪とする施設として」と経緯を語る。

センターでは専門研究員八人のほか、マスコミや自治体から派遣された毎年数人の調査員が防災を研究。自治体職員向け研修の受講者は延べ二千五百人以上。都道府県に出向き、知事らに研修する「トップフォーラム」も年五回実施する。

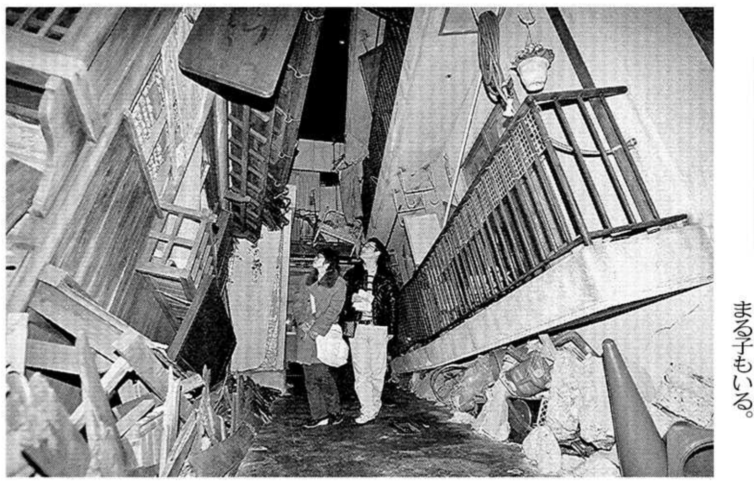
同世代が体験談

センターには毎年約五十万人が訪れるが、半分以上が小中高生だ。転居も含めて、神戸市でも市民の三分の一が震災を未経験の人たちになった。その比率は年々高まる。センターの多治比寛主幹は「次世代を担う子らに伝える役割は一層大きくなる」と話す。

三階の震災を語り継ぐコーナーには、消防士を父に持つ十八歳の女性が語る映像もある。震災当時は三歳。多治比主幹は「同世代の子が話す体験なら、子どもたちも親身に聞いてくれる」と話す。

横浜市青葉区から訪れた自営業中山弘治さん（三三）は「近く子どもが生まれることもあって見ておきたかった」。被害状況に寒けすら感じたと言うが、「体験者がスタッフにいる意味は大きい。被害は小さくできると感じた」。

兵庫県芦屋市の自営業楠田裕彦さん（三七）は被災者だが、友人の中山さんに誘われて初めて来館した。「これまで震災に向き合えなかった。でも力になってくれる優しい人らはたくさんいた。大事なのは地震を伝えること。神戸の経験が次に生きるはず」と、センターを見学した感想を話した。



リアルに再現された震災直後の住宅

復興への道のりが紹介されたさまざまな資料＝いずれも神戸市の「人と防災未来センター」で

人と防災未来センター　西館は旧防災未来館。東館は1月に水と減災を学ぶフロアにリニューアルされた。入館料も改定されて小中学生は無料に。高校、大学生四百五十円。大人六百円。月曜休館（月曜が祝日の場合は翌平日）。阪神電鉄岩屋駅、春日野道駅からそれぞれ徒歩約10分、JR灘駅から同12分。電078（262）5050

「身近でも」を市民に

名古屋大地震火山・防災研究センター、田所敬一准教授（地震学）の話　地震の体験施設には二つの目的がある。まず被災体験や被害実態を伝え、防災意識を高めること。さらに重要なのが「身近でも起こり得る」ことを市民に伝えるという側面だ。

東海地方は過去に濃尾地震や三河地震（一九四五年）など大規模地震が起こってきた。近い将来必ず起こるとされる東海・東南海地震に備えるためにも過去の体験や実相を伝え、防災に生かしたい。例えば三河地震。地面が大きく崩れた断層が愛知県の天然記念物に指定され、誰でも自由に観察することができるが、意外に知らない人も多いのではないか。

見学できる建物が必要という意味ではなく、そのような過去のよい題材を教育現場で生かしていかなくてはならない。幼いころから災害教育を取り入れていくことが減災につながっていく。

静岡県地震防災センター

啓発の拠点　地震の揺れ　三次元で体感

東海地震が想定される静岡県には、防災知識と地震対策の啓発を目的に防災教育を担う大がかりな施設がある。県地震防災センター（静岡市葵区）だ。

ガタ、ガタタタッ―。揺れが来ると分かっていても、突き上げるような衝撃に手すりを思わず握ってしまう。施設の目玉の一つ、地震体験コーナーでは、過去に起きた大地震の揺れを体験できる。防災研修のため訪れたブラジル人学校の子どもは、再現された十数秒の阪神大震災の揺れに「怖かった」と顔を引きつらせた。起震車と違って、前後・左右・上下の三方向に動く三次元型が装置の特徴。阪神大震災のほか想定東海地震、新潟地震などの震度データが組み込まれており、最大震度7の揺れが起こせる。ただし、けが人が出る恐れもあり、体験できる最大震度は6強までだ。

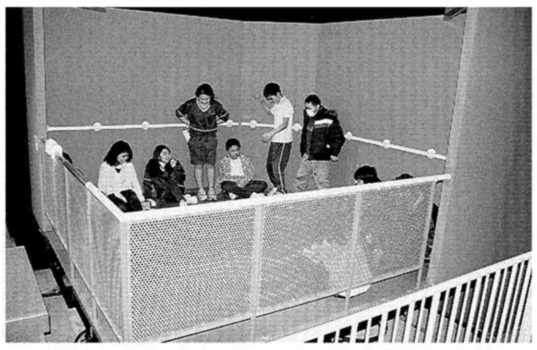
直径九㍍の大型ドームスクリーンと、縦三十㍍、横十㍍の津波水槽を備えるのは津波シミュレーションシアターだ。ドーンという大音響とともに、模型の海辺の町に繰り返し津波が襲ってくる様子を紹介し、恐ろしさと対策を分かりやすく解説する。

地震時に食器棚や本棚、テレビなど家具の転倒防止を施した部屋と全く対策していない部屋の様子を比較したり、非常食や備蓄品、防災ベッドなどの家庭内対策用品を紹介したりする展示も。地震関係の蔵書を集めた図書室もある。

センターは一九八九年四月に開館し、鉄筋コンクリート三階建て延べ約三千平方㍍。二〇〇三年には約一億五千万円をかけて大規模改装し、最新の防災知識を導入した。国内外から年間約四万人が訪れる。

岩田孝仁所長は「どう対策をすればいいか、見て触って体験して学ぶことができる施設。防災を考えるきっかけにしてもらいたい」と利用を呼びかける。電054（251）7100。

（梅田歳晴）



前後左右上下３方向に動く三次元型の起震装置で阪神大震災の揺れなどを体感する来館者＝静岡市葵区で

中部地方のその他施設

【福井市防災センター】

一九四八（昭和二十三）年六月二十八日に起き、阪神大震災までは戦後最大の死者三千七百二十八人に上った福井地震。戦後復興間もない福井市街地の大部分が破壊された惨事を写真や体験装置で今に伝えるのが市防災センター（福井市）だ。六畳ほどの起震室では、福井地震と同じ最大震度7の揺れを三分間体感できる。

【地震断層観察館】

岐阜県本巣市の地震断層観察館では、マグニチュード（M）8・0の濃尾地震で生じた上下に六㍍もずれた地震断層を間近に見ることができる。一八九一（明治二十四）年十月二十八日に起きた濃尾地震は内陸部で起きた最大級の直下型地震といわれる。震源地の同市根尾水鳥（みどり）地区では全長一㌔にわたって土地が隆起し根尾谷断層ができた。

【松代地震センター】

一九六五（昭和四十）年から五年間にわたり、有感地震六万二千回、無感地震は六十四万五千回以上を観測した長野県・松代群発地震。死者はなかったが地滑りなどで大きな被害を出した。六七年に設立され、群発地震の地震データの収集と情報の一元化に取り組み、現在も微弱地震の調査を続けている。

*

お断り　シリーズ「わが家を強く」は休みました。

世代を越えて住み継ぐ家

TVCM絶賛放映中!!
Let's Click!
スウェーデンハウス株式会社
スウェーデンハウス名古屋　検索

© 中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています。